

029  
327  
1

冬  
か  
ま



029  
327  
1

愛知女子  
第 115 / 15 號  
書 圖

230  
11575

藤

藤

聽亭讀歌

右松北の帝のまゝくとも明く長宗に初婚のなま  
りせれ林葉のほろくとまき清く河をを由り

橋小は面をいふ 月おは鐘を奏む

南首此もの時組板此宮小にまゝい  
彦山此雨の夜雷を魚のまにまといぬ

君幼きや

論語此辭

般君の文

ふすーしきけい非袴の襪とまぬれ  
すふさささこれ六塵の罪難と作す可

見聞に姑く世情の端あきとも

伐木丁之やーとまぬれ色初とま

葉風の萩と麻の路田を

視聽しきり一林形さハ

碇し竹岐の藪をーしきり  
沖の鷗此岸あふらん  
比しれ耳小を隔あさすーと  
胸あきささくに色折る山道

竹老く

故人庵云々紀負れ如く一睡此  
償ふを下し給うるを玉草此仕優  
あま道小虚實れ自らとて安情の  
お後此明くは法を漢文をより 約を  
假名小てくは和漢の博達なる  
吾ふつてくは由よめ之濫らん少

永くけまればおぼゆる伝まるとは  
あまりもとらふを——これとて  
親——き旅くねをなねれ吹越の  
かき道ふといつてけかく一冊とらぬ  
是きも月報の要知をわはらん

二月十日



五の仙

うみまうら 水仙のききるぬ

雪もふゆにききり明る

長坂をたるとはこらもにしく

おろくく居るもいハヤク

花つめやうに 一向の針は

まればさうしつにまれば

何ん

紀負

の権

怒青

之甫

苞く

ワ 月夜の歌

やえ種りてに 春のむはく

こちねもさうああさういふ心のさ

ふにひとらほ 小豆はけを

おあさ月とさあああさあおと

晩くぬえうさの 雲の 雲の

はとと山さうさああさういふ

何んさうさうさああさういふ

柳青

く

負

権

青

甫

、

善

巻

五

障子すまふと横河一立ふれ  
く

以て小水ふらふ夕暮  
負

あうふもふ下ゆく水の音  
推

まゝちうさいやふ布枕  
音

物くま竹あま空舞の塵やう  
甫

投やりしうておけぬる弱  
く

ちうあうとくさ囁ふふた底うら  
音

女あまはれあはれ一歩  
く

交草の中にやほほくむあやめ  
負

踊る法守れとをなうあ  
推

近ううる陰るれ癖をすうい  
音

まをとうまはむ組籠  
甫

中まはあなうらうね松の音  
く

木相明れ時のもふあはれ  
音

いつのうらうらうて月の縁  
く

海土の仕業れあうに紙を  
負

そ  
112

竹や名もなき垣より

竹

傍つゝ筆れれおろろ

青

お登の顔へかゝるを面儀より

甫

とこやうと心のかくまきわ

と

おつゝとれとわくくむの歌

舌

神喜の中にまけりて

筆

殺身抄

尺ゆきまぬねりきなりけり

権原 有施

藤原を起すくわたり

藤原 権原

まゝまゝ中々くけり

藤原 権原

下言をまゝきき

南校園 知書

常のむや陸をりぬ

故

杖きりや梅をりぬ

杖

家へくあまうそわし 鶯 鶯 鶯  
南の  
鶯 鶯

かまこれの母れしうまこれぬ  
百景  
楊水

神倉やゆきいむの枯尾む  
燕 尾

水もや若の森えれ 少す時  
急 破

あは森のもさきあし 娘のこれ  
産 後

む茶もやさしこれる 雨の中  
希 由

清水くく涌きあきや 枯 柳  
甚 紅

雨の後つとやうに けしの娘  
紀 貞

きり灯のゆあつとさき けし  
清 巴

極るまをさしむや けしきさ  
茄 壳

くられの待さうりく 麻の夢  
網 指

さきよりこれ 藤 木 鳴 けしきさ  
里 橋

入相まはさくく けしきさ  
雨 桂

山崎やと心ささしき 水の音  
近 水

やまのまやささしき けしきさ  
甚 丈

城下りのまにゆれあし 菊の葉  
山 市



春風くるくくわたり梅の枝 梅の枝

片袖をうめてもたう 春時雨 古扇

掬ひぬきとあり合飲の也 カワヤ 文柱

冷風のかうふあり タキホ 仙化

草やうれあふ カヤ 柳下

水にぬき カヤ 柳下

落し小留を カヤ 唯吹

ふひとあ カヤ 仙く

山竹に月のある 丁 坊

掃く 紀 貞

そい 新 涼

洗濯 新 涼

輝 多 翠

泣雪 市 明

かり 葵 青

ま 東 河

繪

八

至れあれは至れある終りし柳を 丑希坊

吹るくくく新日もある柳の 小作

多葉や一回隔る 風の音 兵山

る布や思はく尺端は垣隙 柳吹

おしそれおほくくくくくくく 起船

揃つるや内やくくと立われ 誘之

柳風のせいほくくくくくく 雨柳

柳風を尺端はあり神乳 南月

ほまは月日とあそい松う一葉 二舟

南風や垣ふつふは産れ為る 魁雄

柳風は言ふまゝありけさの音 柳波

交葉やくとあつきの陸ひさし 同之

姑也れあそをばよの被屋を 幽香

くくくくくくくくくくくく 意之

今片に福とらに落葉を 吟之

ぬは物小睡くくくくくく 冥仙

傾城の窟小唄きりまれ月 故庵

まきこもり唐小唄きり種一糸 町山

三神の娘やゆくの純こりり 妻白

六月を背願せわや田原の 明子

船のこりは立ちまれ新あさか 之南

神事や宵れあゝの病り道 可矣

とらふ印と垣まきれしうみまはぬ 柳堂

く新川の船とこりりすま 柳堂

まけハ家こゝろ小唄く藤の色 守之

下宿やまきり道の花は春 松青

ゆめゆめ山にけきりゆくハ 若新

結ぶまれきりしや山や神さる 市家

虫の言れ花あまら上柳をさる 山更

ゆめゆめさるさるハ柳柳さる 柳岐

まけこれの種こゆするや雲れ家 怨青

夕暮れ野まゆきこりりま 今此

夕々しき雨の音 繩月 二把

ゆづりたる鐘の音と柳の音 荻石

雨の音と雨の音と 紀貞

水もやまは海へとく 芳林

晩鐘の音も 知るは 志村

一と昔れをさし 友志

一回はゆきま 雨静

波に耳のこえやまあ

昔々たるあきりも じやうき カマヤ 里松

舟も小落ゆく 二口美久 カマヤ 荻子

夏草や 陰もくく 留道 カマヤ 為久

秋風をよみて 今も 清水 カマヤ 祝里

ひらりゆく かなも 柳音 カマヤ 柳音

雨もこれ 秋も 柳の音 カマヤ 柳音

三月月を 捨ひし 汐千 カマヤ 一彦

ふりし 雨の音も 百人の音 カマヤ 志村

古歌より採く四葉草

うも又杉用 雪月見 川依  
 長し馬をほり 山路や藤の色 櫻花  
 舟の影やさけと 雲をききあり 色  
 一と葉してハ又 春と神一 旭園  
 葉舟とく 後のこゝろ 春と花 柳音  
 鐘をききまゝ 是れぬ山と川 馬千  
 いはくらの 葉をさす せん 花の雨 雪水

春竹やまゝ 春の心 二ツヨロ  
 冬より 春れ一 味や納豆汁 カキヤ 娘山  
 雪のれがく 春とあり 竹の奥 カキヤ 筑糸  
 春雨れがく 春とあり 鴨の色 カキヤ 以奥  
 短衣や 春の 春の 春 カキヤ 春角  
 月ひと 春の 春の 春 カキヤ 希明  
 月ひと 春の 春の 春 カキヤ 乙枝  
 一葉く 月小 春の 春の 春 カキヤ 聖筆

月より水もや育れりカフツ 水 家六

灯もや燈々カフツ 下も玉川カフツ 里曉

螢火や家水新玉進カフツ 曲浦

輪つちや水も一カフツ かつらカフツ 帆之

も水も此雨も水新ありカフツ 野登

う水降る舟の横カフツ 巴文

山も水縁登りカフツ 神志カフツ 之

明も此新やカフツ 水も此も 舊海

山産此岩根カフツ 維カフツ 此也 若唱

春水も水も此カフツ 鳴カフツ 水も此 若公望

春雨や若成カフツ 千波も 柳志カフツ 左瀬

水もや浪もカフツ 水も此 水も此 馬林

家も水も此カフツ 柳も此 柳も此 吟吹

泡も水も此カフツ あり あり 柳も此 相二

も水も此カフツ 奥も此 水も此 孤角

人新も水も此カフツ あり あり 若友

入相のほとけさつれ一葉はく カチ 竹山

吹くももる葉も何くそ神かれ カチ 近女

汲るもつり月れ清水れ カチ 似藤

魚通よこのあろうと落葉うら カチ 友子

物言と舟の中うと神忘れ カチ 友菜

昔のちや鐘の音のこきうと カチ 友芳

ころとと子深おちりてちり松葉 カチ 苞

とくし野きもれはれや雲れ葉 カチ 寄書

波音い一板りもたき カチ 柁白

浮もや水もあひとそゆ カチ 巴下

むらもやむりこれ神きき カチ 紀貞

うしとちれ座おこさへ カチ 近司

女を思ひもる夕もれや カチ の晴

常よりハワ カチ 拍青

巾のむれ雲や思ふれも カチ 吟支

うしとちや カチ 和夕

くさ雨の音は けしきも けしきも 之雨

をききやこれききい 凡そ雪の中 の推

こがしや松のこきく 夕鶴 可友

入相ふらききの 柳 乙通

水きれいふく 落く 枯野 加蓋

吹鶴ふくの 赤きしき 赤松 赤松

くのききも 草ふりきき 夕指

く 夕指

く 雪ふるうきあきく 青田が 之雪

暁の雪れわくねや 神 くれ のゆき

澄るこをけききや 柳のこを 寝る寝

雪あしきき出たり 里月を 怒者

雪風や里の雪を 通りぬけ のほ

うきわてり雪ふるき 雪の目 雪を来

啼きききききききききき 海老 カツ

雪れ神きききききききき 菖和



とくは乳小鷲を文里此花を  
河吹

一歩く人歩小館く 古井

志く事や深伝くしきる 古川

朽くくや浅海川の腔すし 其様

朽くくのくろふくろの故ヤリか 為ト

リ 遠くくもすけなき 布川

物くわや育れ思ふ 友

月をくくを後小 秋色

とくくく早く 氷や春のけさ 一色坊

初くくくれり知くく 岬のむ 町上

むく雨の雲や 柳くく 相のむ 小権

とく物きの山を

選者種ま

夕くくれれ 柳くく 喜あり 冬かあ 紀貞

宝曆十一年 度 取手

橋治板

